





三

木  
有  
打  
佐

先師徳由一刺の同知  
世に禮一江戸の袋原の  
廿の事郷運結石材に  
考の終より年々隆盛に  
其の所の材目ありし事  
と思ふ此山を極句



一々 慶月 通る 山先  
まへ 通る 受入 孔 形 練 花  
相 伝 文 長 一 先 の 為 知  
風 葉 成 変 一 一 根 伐 階 場  
出 一 形 各 已 事 跡 の 事 事 事  
節 之 一 所 又 字 遣 一 曲 終 万

句 仍 八 取 小 足 一 所 北 方  
其 堅 一 一 一 南 亦 此 節  
う 一 一 一 一 一 一 組 三  
り 輯 麻 一 一 贈 一 一 一 華 下  
と 流 一 一 一 世 乃 材 用 之  
也 一 一 一 一 一 一 一 一 喜 一



張騫の織女を逢ふ可い所  
 乞篋の徳をれんや 海に  
 神の君との流もさるる  
 下馬川波にまわく  
 隣る角あつぬと  
 那くゆるるをさるる本

上冊之順

壺月	來川
蓮谷	可圭
和推	水園
泰室	沾山
晋如	貞磨
安士	咫尺
柯木	
東里	

下冊之並

青瀨	音璫
風葉	超波
成屋	蓮雨
古井	長水
半麟	蓮之
立些	
松峰	
追佳一卷九吟	



乾子点式

羅浮

十八点

暗香浮动月黄昏

十五点

東閣詩情

十一点

江南梅

七点

朱

五一点

長

三一点

第一

崎山氏

壺月

織居のちとせと組也少後

水より歎乃枝講露房

彩雲ら死ち如菜の多ふあふ

四本は一程のちも川一方

筆と筆の影流りあふる月の

原のち押さく影も流るる土







新の良如ゆの元蟲らさうり  
かましやとせも昔也て心あじ  
此類の仁をて同て赤坂の  
証はるゆて控子とゆひ  
流法乃場中瓦らとゆひ  
流ゆる道あらたてやる中  
芽中の中より赤梅は月  
それと塔より繁く何

秋ゆの梅は春の如く人  
令産乃高ら代と此三島  
餘はてと細くゆくと謀  
久日年終るゆと者玉  
久産もあ日花も花も繁ふ  
春は根芽はと繁は抱へ

新の良如



羅浮一

西亭松久んま

東閣一

代々乃之旨

江南梅三

冠中筆

第三

乳房

朱四

長七

長七  
久能日光

第二

箕輪氏

蓮谷

灌餅如志ヤシ青つ小島ノ奥  
海。起とる海とる月  
筆とる年如顔の杭とる中  
下とるし遠じも海嶽高岸ん  
清とるも志の青の月とる  
竟とる中とる戸とる好つとる



証を教ふ能くお場の地移し  
所を破法に出る者中  
明儀を世りかゝるに悟色  
す一髪刺つて知を可くさ  
二階らとこへあかた地を突  
きつて井へや新と別る分  
首月を禪を思ふと身思ふと  
る寺の傍に化けむら雨

字にじか如神のふつと字櫻吉  
住持乃能法甚えれと  
あつてうし麻を磨むるの月  
あらうとあは志は下りて筆  
能くゆふと乞食の様を座すも  
是れは出家をまつと心之業  
名に同起人あつても玉像の  
帯とくれ乃ららると若因鶴



舟は波をこえ流るるうづらき  
くくくくくくくくくくくく  
秋成の禁ちりし味物と結  
為すうし帰る秋乃夕暮  
うら秋の色はらゆくと端平  
危ら何とせしむる孫  
芝浦のわやうくくくく  
難何くくくくくくく

ウ

春の端ら秋をしんて管の音  
小をび初らに結く句菊  
上へて山先つて中乃所  
結るまがけくくくく  
秋をく味と尺さくくく  
秋乃満とくくくく



東園二

首

江南橋四

名心者中

祐成

朱三

才三

勾菊

長六

乞食の伴

茅田翁

錦子

地蔵うり

年三

堀尾氏

和推

誰かか概燭うけも夏に在

月を有明かこりうら編

輪場の上農証書に有少く

各富も尺三は臨行也

年四の巻くは鶴也に那

菊出乃徳名松河月夜



舞子かき二人五寸のむし一巻  
 東江宮夜祭と結ぶさしや  
 明もくすまの戸前しは所り  
 蓮の尺ももささぐさ結しく  
 懐かしと永代花と若佛  
 丸の月もさし後家の後明  
 おつけと標とくは道も  
 けささるおる骨中り

上七

一<sup>章</sup>の糸丸らまの江戸歌  
 表乃ゆきくはるは  
 官旗の影し折縁ら本代  
 揚屋北むし板の白く智  
 鳥籠さうけくすら木俵  
 け籠針乃宮り  
 美酒の糸やとらる初  
 敷結も控はあ貝の



お中者候を辰瓦迄金新  
猶乃續うけの禁制も  
吉平(留名)と候しと舉世  
時而し候と云ふ所のうそ  
氣象乃候しと云ふ位上戸  
う海し氣孤獨と云ふ殊別  
殊湯と云ふ月と云ふ先  
じと云ふ(字)と云ふ候の候

ウ

候と云ふと云ふしと候の候と云  
うと云ふ乃外と云ふ候と云  
高と云ふと云ふ男が候と云  
幼少一産并しと云ふの候  
熟名七七十五と云ふと云  
人(名)と云ふと云ふと云











伸<sup>童</sup>まうハ白じ傘持星乃糸  
色お坐即済く相れの外  
割深く去る路午相求るん  
太道お相まの程ぬり  
狼獨る相る台後家の妹小備  
お七の母を月夜身延より  
神と管と虫の原にまゝ  
番屋乃はほまぶくと糸

如<sup>ツ</sup>んがハ太小はるに程に七  
奥津河原のわが聲りそ如  
有<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>お乃糞へ度るもまき  
念<sup>ツ</sup>伸坊主とのわがねし  
茵<sup>ツ</sup>擔<sup>ツ</sup>死の何年月の女舞し  
日<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>と<sup>ツ</sup>は<sup>ツ</sup>く<sup>ツ</sup>ま<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>の<sup>ツ</sup>路



冠一

後密

索一

中密

江南索四

天文橋

かろき

銀

きん

朱三

口

せ

奥

長六

三

身五

石内氏  
かろきの松乃  
あまの情乃  
長六

晋如

河  
巴  
尾  
松  
光  
年







小徳の中も徳有んじり  
河のふも月夜輝くさん  
信法路の如き後無木月と光  
佛乃様一是我が施主  
湯屋腐も流るる世もつ  
其事なく徳古印に  
尚存も寸言も今字と  
時法字帳にあり 礎

ウ

有る来と破軍も有る志  
後法妹背と知る陽心  
皮切らぬかゆく乃昌三流  
創体一巻く張つく  
死を乃法介非互に  
皇の月より年法と



月黄昏一

三月十日

東岡一

玄のみま

江南梅四

了ん炭

角力

温公

ちんく岩

朱三

森与

手恋

昌三仇

長六

第六

坂井氏

安士

用也その唐と二十とそいふか子  
 神は香とすけ 船 網白  
 大層と排め六つ傍乃付りて  
 掃除乞食もみ手控あま  
 流 根砂と細きしゆの月  
 下と流橋板の所道 推舞



シ  
櫻年法石下ノ首原ノ法廷宮  
經業按乃すの如 籟  
又首ノ一字掌坊元按名  
質 而皆之とて如 光 輯  
法人乃娘とて名 々 心  
乃ううノ研胃 局ノ 孫 権  
是も能名とてつゝの玉 光  
氣持乃つ子乃 孫 家ノ 乃

表飯の飯そのまは給知座本判  
月尺女計り中後乃辭ニ  
辰在つゝ孫小もまは純扇  
船子つゝちり解る知本母古  
ナ  
解の業と經ら仰い下 規さる  
時ノ 范 蠡 玉 姓 乃 墓  
赤山柳 弱く知むうの五宝丹  
局ノ 神 樂ノ 舟とては乃



天定也 柳野は日本長河  
根より深きより小角乃編  
螺貝の跡より踏くをわづら  
この一子六つ 扇は 扇成  
香松の推も引下乃人  
世と物なと書はく一守り  
白鳥を先へ書くおる忘の月  
聖来年へ 飛は金一高

ウ

角力とたうもしくかすのそ敵お  
いはいおもえしと亀とを母  
温泉えうら懐骨枕死と江戸  
棟上餅と象の裁判  
おとんし 船の一人死は船  
耕すもたぬ代の大象



東岡二  
 五輪  
 江南堂四  
 中三  
 朱二  
 五宝丹  
 長八  
 郭公  
 長八

第七

横本氏  
 柯木

蔓もの花より花をいふ月  
 花乃花は花は花は花  
 寸家おの二流と何れ流より  
 ういちまの言はばをうらま  
 他はともあつたのやうな  
 りんごの花は花は花は花



虚号為人証あ師の山せり  
靡如房乃美く出る性  
能くしらきし好くらの足籠  
一衣をけり。サキーらの節  
うつらじも確字確字あ。摩古  
小生無情ら名存くら南心  
く思あさぬよしの藤きり  
上初まやりの金根越乃板

猶月仕あし醫者のまづし織  
師の香も好よ出ありのけ  
そ新めく度うる細とむる花や  
湯とくはあは海のうけ所  
+ 同果とや毒もあはけけし合  
人目のひきとあ虫乃指  
度衣もあはづらの事とわのあ  
嗚乃くはのたか屋へ責



大石の海にやうすはるる雲  
と河津院より紅雲をよせし  
重抄の御書にやうすはるる  
飛脚の御書にやうすはるる  
お身より御書にやうすはるる  
跡とよし人の新乃研ふり  
浅月の本に存る相うも  
蓋の知る日と四の末とよし

新編の御書にやうすはるる  
燈籠の御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる  
御書にやうすはるる



東園二  
 大脚乃心  
 江南橋三  
 女房  
 朱四  
 一和歌  
 長六  
 楊梅  
 藤  
 座  
 山

第八

西村氏  
東里

万世の家を一軒回す  
 空の橋乃ととも  
 新の巻角の  
 餅は字に  
 餅の  
 織乞



夕  
其初も昔もいふく如新乃る  
若乃原水とゆふこまに候めり  
鼓屋町の菊屋の茶屋に居る  
足袋を履きし頃の赤やと  
蓮花も一三の師乃新まじり  
目を揉みし血先胆枯刺  
そと紋も赤梅の香ばうげん  
知も鹽片の夏彩

十  
園屋の傍乃る新築の傍  
古藪の音も十二階に先  
於燈の池もも庭の空  
林のゆきも庭の空  
新築の回廊に押す  
藤乃原中の庭の空  
竹の葉も月と紅の空  
中月成矣新の空



物はつて針の智乃着の上  
 如慮めく武士の志願歟  
後天信忠のうら  
 物言一喜乃活衣わたり  
 山門のつらみはあふ海  
 かなしきりしあふの活能備  
 料理名なきと何もの。瓶  
 供の気へ燃らつて有る物乃月  
 建く是らうと流と名へ

マ

船妻乃志りの如素礼  
 天地用けむと心と麻髪  
 三よの物いつうよ一着湯  
 吾料ゆら刺されとあり  
 桑子く物つて心器と衣並  
 下しと中々難の顔見え



東閣二  
 嘴乃赤さ  
 江南菴四  
 麻乃中  
 山陽公  
 朱三  
 如んま  
 長七  
 山門  
 流乃牙  
 長七  
 足立氏  
 來川

第九

足立氏  
 來川

控くよけ化お屋補や下橋  
 味のこまむら角一川うけ  
 長の解乃く凡能乃染河引  
 敷よりゆらしく一所の西  
 洞徳月流川流観より  
 下く乃が字乃跡やけが字



ト  
と結海は位よりと丸島椒  
不伴くうその丸く丸く  
家主へ頼むる用油ねじ  
乳母うすく死名の長程  
東の伝真心知りし。操りし  
喰吐もししと蘇りしの上  
法事程長くおんしと  
巻くせむく結海まじ月

十  
柿やもれもそく思座の坊  
やくまふ先を知りて遊上  
物ありしやし店の紅いけ  
二月二日の醫名乃軍死  
ふしじとのふこの中ね先後  
船中は玉徳家らふふ  
船に於て探るはる治如来  
座席しこの為と記す



江尾一考う月舟の鳥嶽とのべ  
山江跡も青あぐむ禪  
水月といふ色なきは  
色乃不しくその聲も  
齋より磯より音ありし  
角よりけしむ水乃感  
歌の月空も結わぬ  
地より又刀をとりて

ウ

果てしなく橋つと名も手向  
此方出ると深き海へ  
雲のうへに雲をさせる  
花巻のやぶに吾の抱へ  
野火を御座る赤の嶽山  
千々重なるも乃結



月黄昏一

夕け

江南梅五

不<sup>つ</sup>虚

朝乃

可<sup>く</sup>先

作<sup>し</sup>玉

深<sup>く</sup>立

朱四

才三

氣<sup>け</sup>舟

江<sup>か</sup>鳥

そ<sup>の</sup>燈

長六

第十

本多氏

可圭

松<sup>の</sup>如<sup>く</sup>探<sup>し</sup>幽<sup>く</sup>書<sup>の</sup>と<sup>は</sup>待<sup>た</sup>し<sup>て</sup>経<sup>た</sup>  
 千<sup>の</sup>乃<sup>は</sup>亭<sup>へ</sup>と<sup>し</sup>て<sup>は</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>も</sup>の<sup>の</sup>  
 一<sup>の</sup>類<sup>は</sup>言<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>珠<sup>の</sup>の<sup>の</sup>想<sup>は</sup>也<sup>と</sup>  
 同<sup>じ</sup>名<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>乃<sup>は</sup>扇<sup>の</sup>持<sup>り</sup>り<sup>の</sup>行<sup>は</sup>  
 身<sup>は</sup>是<sup>の</sup>階<sup>に</sup>子<sup>は</sup>か<sup>ら</sup>見<sup>る</sup>る<sup>の</sup>月<sup>は</sup>  
 名<sup>は</sup>紫<sup>の</sup>上<sup>の</sup>白<sup>の</sup>燈<sup>と</sup>ち<sup>り</sup>の<sup>の</sup>字<sup>の</sup>り



夕  
 乃取の字の留へる根をわす  
 馬牙も根ごと五艘攻めず  
 獲物くわつて獲るは  
 然らざる由の筆のよふ  
 叟ノ曰ク豫倉海老と孫江  
元禄三年の白洲の戦い  
 響海乃乾く  
 おつたふち代るは音聲  
 吸月と出神代乃すの

十  
 指おとぬ人台人産産  
 水相観より嘆と海と  
 十二夜乞食も産死乃心  
 何ぞ免れぬ有る三日月  
 蓋と根とわえくは表の敷  
 蘇子乃着は根髪うら菜子  
 尺とくま心と真如の印  
 一字が建一と根の如入







月夜留一

一字と連

江南梅五

徳介し

老乃教

江戸の色

朱三

口々

井川山

長六

神代

三。恋

玉子額

第十一

雲津氏

水國

井川山 老乃教 江戸の色 朱三 口々 長六  
 神代 三。恋 玉子額  
 月夜留一 一字と連 江南梅五 徳介し

井川山 老乃教 江戸の色 朱三 口々 長六  
 神代 三。恋 玉子額  
 月夜留一 一字と連 江南梅五 徳介し



一、  
枕より小豆入給え年  
仙樂の宵中知る能く都の守り  
所城沼たし、鯛の志く若  
路法く、嫁いと元んと此法不  
夜露法度乃悔くふ、案  
際手書のと、此書蒲ふる、梅茶  
急急乃況有他阿乃嘆

競如村より蒸物傳り、李の露  
とく、鹽はわき、あけ、  
月来の、お守、舟の、掛ふ、家、中、餐  
坐老と盤く、工、支、と、  
度、刻、乃、け、ま、く、表、の、吹、出、也  
旅、翁、お、く、名、鬼、お、く、  
と、事、場、お、く、顔、と、磨、む、の、洞、扇  
ち、と、傾、城、乃、中、念、佛



神事じの終る後、に御一太刀  
海乃井戸へ、御金  
奉引、の賜と、御金  
所、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南

シ

根、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南  
御、乃、底と、一、御、御、南

御、乃、底と、一、御、御、南



東園二  
 元年  
 江南橋三  
 朱三  
 大刀  
 他河  
 長七

第十二

内田氏  
 沾山

新深谷の橋ふじ乃も深うぬ  
 夏ら蘇船去ん<sup>根</sup>う子の川  
 警乃子河のまの鹽路ふとる  
 堆朱海舟のゆ倉る忽と  
 高の月ねらもしうの腕まうり  
 水河種も舌了耕と



上人金持母を金持母と稱す  
たしく元は清し殿の御心  
茶漬のくらしは御心  
梅つゝ乃玉の儀事乃玉  
そのくしと金乃新を金  
千と物の枝と鳥鉄砲  
板板と木板乃乃乃の  
鞠蹴の儀と乃乃乃月

仁徳の屋の背中を徳村と  
肥後後茶殿宮りく如  
玉殿も信平しむのう  
東馬大寺柳中よ  
佛心前之月五日推  
出の御乃系  
不甲好く素や子  
啼しと鶴とあるじ



羽生島へは清水江に船は  
船出船中へ三方乃うへ  
正字表の中へ或る至るまで  
阿漕くと船名はわけ  
河合松五と有るは  
つと燈をうりし海に  
地帯のうへに舟解へ舟  
まゝのり刀へ舟飛渡り

フ

小山依ち山舟一乃家うり  
もくし者へ家月飛舟  
以後舟の形を舟の舟  
舟舟の舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟



東関二

智吉廻

貴心膏

江菊梅三

保原の富子

中三  
恋欲

朱四

ひくま帆

千々切

舞いこ

心伝美

七

横地氏

第十三

題答帽子

貞磨

女形とんちから素人杜有  
 水産河豚乃神も玉彦  
 習ふのささぶ奇枕船王  
 礼節と打と弄る月一乃  
 新玉もげさ定名の秋乃中  
 行々日年燈籠飛少







川舟の類遠じある事なり  
智恵乃あるしけぬる人衣の  
月影は古松と空く世をへ  
月さじりき地火焼く土の溜  
海山の須実とまると月のか  
るふ船一葉 吹っけ  
ぬんぞも海と幾度乃改  
あなまじしし一葉。也

茅門を網苔似合知初うまら  
千羽の地摺と揚りしは  
書如之何なるも志の度  
著るしけぬる事なし  
脱者人あきらむ神さ  
月一葉拂二月の宵平



東園二  
 形々  
 江南梅四  
 川井  
 樹五  
 朱三  
 長六  
 世江柳  
 一  
 不男

第十四

大場氏  
 咫尺

すはま 愛宕 の大物餅乃上  
 善尾 毛 谷中下入  
 橋榭 桃 儀 春 播 下  
 又 絶 扇 心 終 下 全 上  
 総 亦 の 三 階 下 何 月  
 由 留 下 地 下 所 下 給



つ  
坪川とてなす載せし土人せきし粉  
茶山らしき乃極る伐る 藤  
西よりし者来りて地りて先づ地  
西地乃乳と後る島の日  
婦とて屋の概を極むし極る身  
正一様とて集ふらうとてちり 後女  
種つよ乃極る極るしと極る極る  
無しの異極の美の海生の

十  
夕房の先へあまのまよふつ  
すまゝく鷹上極る乃首  
さゝりてしゆとて無極の月  
十和義とて深き極る川  
みかた極る極る島の徒羽織  
多月極る極る極る極る事  
あまの日の陰へ極る若しり  
菅永山とてまよふ二乃極



ト書乃古句はつる多命  
事ふこと穢多し人拙し  
引得る乞食乃亦の引く事  
若し約しは踏く是乃  
あふくとも徳麻を掛るは立  
竹より歩く八百里入る  
さ好うくも秋を想ふは乃場  
都屋恒有のあふる峰井平

シ  
藍さしと先付しは家歌  
空に雲を想ふは乃文  
上向んくは乃乃霧腺  
くもんの舟を若者切ら又  
相二重のうきを乃乃  
枯水つく世所四海浪



Handwritten characters at the top left of the left page.

Handwritten characters in the upper center of the left page.



東岡二  
引守  
江南泰四  
とまろり  
阿ま酒  
朱三  
中三  
候月候  
長六

先守  
とまろり  
ふま酒  
名のり



Handwritten characters on the right edge of the right page.



